大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十六卷　第五號

昭和十三年五月一日發行

論叢

貨幣と利子……文學博士　高田保馬

支那農業の片影……法學博士　財部靜治

ソロキンの社會的文化的過程形式論の評價……文學博士　米田庄太郎

貨幣の本質とその價値……商學士　中山伊知郎

時論

物價騰貴と消費節約……經濟學博士　谷口吉彦

研究

再保險形態の究極的發展……經濟學士　佐波宣平

中立貨幣と外國爲替相場……經濟學士　中谷實

ダンピングの理論……經濟學士　岡倉伯士

說苑

幕末の上海貿易……經濟學博士　本庄榮治郎

差額地代と限界生產力說……經濟學士　上村鎭威

附錄

雜報・外國雜誌論題

（禁轉載）

貨幣の本質とその價値（下）

——高田博士に答ふ——

中山伊知郎

五

貨幣の本質に關する私見の根本的な諸點は略々以上で盡される。從つて私見と高田博士説との相違も亦右の本質觀を延長することによつて自然に明にせられるであらう。唯右の本質觀に關聯して吾々は更に茲で貨幣の價値の問題にふれて一言しなければならぬ。何故なれば一般に貨幣價値論に關聯することなしには貨幣の本質論はその重要なく、私がソルラスに對する右の如き解釋の上に打ち立てたところの貨幣觀も亦意識的に一定の貨幣價値説への方向を採るものだからである。

然らばこの方向は如何なるものであるか。吾々は茲でも亦貨幣價値論一般を詳論する餘裕をもたない故に所論を嚴密にこの必要なる一點に限定して行きたいと思ふ。さうするとこの問題に對して先づ與へられる一般的な答は貨幣價値の問題を何よりも先づ量的且つ動的な問題として把握することであらう。貨幣の本質を交換手段に認める見方からは指圖證券的な貨幣價値觀が生れ又從つて貨値の數量説的な把握が導かれることは卽に屢々指摘せられたところであつて改めて云ふまでもない。吾々は茲に所謂指圖證券説乃至數量説の意義を以て量的且つ動的

な貨幣價値論の性格を指示するものとして確定するに止めておかう。實際交換手段としての貨幣の價値は第一義的には貨幣の購買力に外ならず、この購買力の大いさ並びにその變動は先づ貨幣と財貨との對立の指圖證券的解釋によつて、從つて又存在する貨幣の數量との關係に於て導き出されねばならないであらう。吾々はこの點に於て貨幣の價値の問題をその量的變動の問題、換言すれば貨幣の購買力の變動の問題として把握する多くの論者に贊同すると共に、むしろ問題をこの方向に推し進めることによつて個別的價格比例の問題から物價水準決定の問題への足場を得たいと考へつゝあるものである。

唯然し乍ら吾々の貨幣觀を以てすれば、貨幣が貨幣として右の如き交換價値を有し得ることの根據は單純にそれが交換手段たるところから由來するものではない。それは唯所謂計算貨幣を實現する限りに於てさうであるにすぎない。そのことは以上で與へられる貨幣の定義の單なる文句解釋によつても一應は明白であらう。卽ち計算貨幣を實現することは交換手段をして抑も貨幣たらしめる根據であること以上の如しとすれは、その貨幣の貨幣としての價値も亦計算貨幣の實現と關係を保たねばならないのはむしろ當然とされるのである。しかし吾々の論點は勿論かゝる文句解釋には存しない。論點は直ちにかゝる計算貨幣の實現が只今問題となりつゝある貨幣の價値と如何なる關係に立つかにかゝる。この關係を私は曾て次のやうに述べた。[25]

『吾々が本來の貨幣を以て計算貨幣の一の實現であると考へるならば貨幣は何等かの形に於て價値に關係したものでなければならないことは云ふまでもない。計算貨幣そのものが更に根本的には價値の比較を本質とすることを考へればこの關係は一層明となるであらう。勿論ここに貨幣が關係を保つところの價値は必ずしも貨幣の材料價値たることを必要としない。材料價値はその最も自然的な形態であるけれども、廣義の貨幣の場合の如く貨幣が固有の材料價値を有しない場合には當然他の價値であり得る。

25) 純粹經濟學、124頁。

けれども何れにしても貨幣が一定の價値に關係することはそれが常に計算單位としての貨幣を背景として成立することから生ず當然の歸結であつて、貨幣の標準のるその時々の變更によつて何等の影響をうけるものではない。』

論點を明にするために之に若干の補足をすることを許されたい。先づ茲に云ふところの貨幣の價値は前段に云ふ貨幣の交換價値乃至購買力そのものではない。それは云はゞかゝる購買力をして眞に購買力たらしめるがための價値、換言すれば貨幣をして抑も貨幣たらしめるがための價値である。本文に述べた如くかくの如き價値と貨幣との關係は計算貨幣たる財と交換手段なる財とが同一の財である場合、更に簡單に云へば貨幣自らが素材價値を有する場合に最もよく理解され得るであらう。貨幣の成立を交換の便宜から說明する說明の仕方が多くの有用性をもつてゐる所以である。しかし乍ら貨幣が計算貨幣を實現すると云ふ條件は必ずしもかゝる場合に於てのみ滿されることではない。計算貨幣を實現するところの貨幣は現實に於て最もよく看取し得るやうに屢々それ自ら何等の素材價値を必要としないのみならず、更に溯つて計算貨幣の機能そのものは必ずしもそれ自ら價値ある財を前提として行はれることを必要としないであらう。否現實の貨幣が屢々素材價値をもたずしてよく貨幣たり得ることは、むしろ溯つて計算貨幣の機能そのものが必ずしもそれ自ら價値ある財を前提としないことの結果と解すべきである。この解釋は私の云ふところの計算貨幣の本質を單なる價値の尺度に解する場合には或ひは始から成立しないやうに見えるかも知れない。しかし既に述べた如く私の計算貨幣は決して單なる價値尺度ではない。それはむしろ之によつて間接交換の達し得べき限界を規定するものである。この規定が通常さうであるやうに價値尺度たることと切り離し難いとしても、計算貨幣の本質はかゝる規定そのものにあつて價値尺度たることそれ

自身にはない。若しこの點が充分に强調せられるならば貨幣が一面に於て計算貨幣を實現しつゝ他面に於てその素材價値と分離し得る所以は直ちに明となるであらう。少くとも茲に貨幣と關係を保つところの價値が『必然に材料價値でなければならない』と云ふ岡橋教授の批評が、當らないことゝなる筈である。[26]

私はこゝで岡橋教授の批判に答へることが單に教授に酬ゆる道であるのみならず、進んで私見の意味を更に明瞭ならしめる所以であることを信ずる。しかし乍ら岡橋教授の右の主張は實は單にこの一點に關するものではなくて、反つて私のいま述べつゝある貨幣價値論の全面に關するものである。故に私は教授に對する答に立入るに先立つて、今一歩だけ以上の價値論の歸結を述べておかねばならない。さうしてそれは私の貨幣價値論にとつて極めて重要な一歩である。即ち吾々は以上の行論の第一段に於て交換手段としての貨幣の量的性質を述べ、第二段に於てはかゝる貨幣をして抑も貨幣たらしめる所以の價値について述べた。第三段としてこれから當然に生ずるところの問題はこれら二つの貨幣の價値が相互に如何なる關係に立つかと云ふことである。これに對しては私は曾て次のやうに述べた。『交換手段としての貨幣は一方に於ては固有の材料價値を必要とせず、他方に於ては一定の價値に關係をもたねばならぬことゝなる。このことは貨幣の價値の問題を著しく複雜ならしめる原因である。貨幣の價値を常にその材料たる金屬の價値から說明せんとする所謂金屬主義と、これを全く一の記號又は表章と解するところの所謂名目主義との爭も亦ここに由來するものである』[27]と。この敍述はこゝでも亦問題の所在を明にするために役立つであらう。否、敢て云ふことを許されるならば、この敍述はその中に既に問題の解決への一つの方向を指示してゐる。即ちそれは貨幣の價値を單にその數量との機械的關係に於て見ることなく、むし

29) 岡橋保教授、貨幣本質の諸問題、180頁
27) 純粹經濟學、124—125頁

ろかゝる見方に對する一種の齒止めを常に貨幣をして抑も貨幣たらしめるところの價値に認めようとするものである。吾々は茲でも亦金屬主義と名目主義との相剋の間に具體的な成長を見るところの此の問題に對して詳論の餘裕なきことを遺憾としなければならぬ。しかしこの問題解決の方向に關しては更に若干の言葉を重ねて其の意味を明白ならしめなければならぬ。既に前段に述べた如く交換手段としての貨幣が一定の交換價値乃至購買力をもつと云ふことは、それが交換手段として云はゞ財貨の世界に對立することから生ずる歸結であつて、從つてその限りに於て貨幣素材の固有の價値は必要なる前提條件ではない。普通に貨幣論上の名目主義と呼ばれるものが鋭く指摘するのはこの點であり、貨幣價値の變動原因として主として貨幣數量の側の變動が注目せられるのもこれがためである。吾々は斯くの如き意味に於て貨幣價値論の最も重要な主題が量的變動論の領域にあることを述べた。しかし乍らこのことは未だ吾々が直ちに形式的な數量說を採ることを意味するものではない。所謂貨幣數量說は右の考へ方を形式的に徹底せしめたものとしては充分に意味をもつであらう、けれども、それは唯それだけの意味に於てはあく迄も形式的な表現にすぎないものであつて、貨幣の交換價値の決定を規定すべき內容をもつものではない。實際貨幣數量說がかゝる內容をもつためには增加される貨幣量が如何なる具體的徑路を以て經濟社會の中にとり入れられるかの分析を必要とし、かゝる分析はやがて根本的に增加される貨幣量が如何にして貨幣として作用するかの基礎問題の考察に導かれざるを得ないのである。數量說が唯かゝる道によつてのみ眞に價値ある理論內容に到達し得るであらうと云ふことは舊い認識であつていま改めて强調する必要はないかも知れぬ。しかし吾々が數量說に對するかゝる批評から讀みとり得る一つの歸結については尙充分に之を强調しなけれ

ばならぬ。約言すれば數量說を內容づけることが貨幣の貨幣たり得る所以の價値を省ることなくしては達成し難いであらうと云ふことこれである。屢々述べた如く茲に貨幣が貨幣たり得る所以の價値と云ふものは單純に素材價値を指すものではない、それはむしろ端的に貨幣の均衡表現の作用に關聯しての價値である。從つて貨幣數量說の內容づけのためにかゝる價値背景を考慮せねばならぬとすることは尙未だ貨幣の價値の決定に關して名目主義と金屬主義との素朴なる併合を必要とすると云ふ意味ではない。それはむしろ貨幣の均衡表現作用を個々の物價水準の間の關係に追及して行くことによつて數量說を動態的に活用しようとする用意をふくむものである。さうしてかくの如き用意は吾々の見るところを以てすれば、單に上述の理論の論理的歸結として要求されるのみではなく既に多少共數量說の內容に立入らうとした人々によつて實際に試みられてゐるところである。『純粹經濟學要論』の第四版に於て展開されたワルラスの數量說はその一つの例證であらう。そこでは周知の如く貨幣の價値が所謂『所望の現金』(encaisse désirée) の思想を基礎として展開せられてゐるのであるが、それは單なる『流通に役立つ現金』(circulation à desservir) の思想を基礎する舊版の敍述に比して、遙に多く動態論への架橋の積極的意義をもつものであり、その意義の積極性の根本は更に溯つて『所望の現金』の主觀價値的基礎づけに見出されるのである。このワルラスの數量說は數量說としても素より完全ではないであらう、しかし乍らそれが所望の現金と云ふ新なる思想によつて貨幣の價値をも主觀價値論の體系の上に礎き上げようとした企圖には充分の注意が拂はれねばならない。吾々は更にシュムペーターの數量說をも茲に數へ入れることが出來るであらう。不幸にしてシュムペーターに於ては交換手段概念の一方的なる强調のために數量說の敍述に現はれたるその內容的意義は比

較的に注目されてゐない。しかし乍ら三つの命題を以て示された其の數量說の內容は決して貨幣價値と貨幣數量との機械的なる關係を示すものではなく、それらは何れもその簡單なる形式の中に含まれたる貨幣の具體的なる動きを規定するものに外ならない。積の和を以て示されたこの數量說の表現から同義反覆以外の何ものをも讀みとり得ないとする人々は全くこの點に眼をおほふものであらう。これらは唯若干の例示に止まる。さうして吾々がこれに依つて示さんとすることは貨幣價値理論に於ける唯一の理論的財產とも云ふべき貨幣數量說に對して眞に價値ある內容を與へるの道は常に之が示す形式を起えて眞に貨幣の動く姿を捕へることであり、之を捕へるがためには貨幣が貨幣たり得るがための價値關係は遂に看過され得ないと云ふことである。

六

私は以上に於て貨幣價値に關する第三段の問題に略答へ得たと思ふ。勿論この第三段の問題には實質上貨幣價値論のあらゆる論點が集まるのであつて、從つて上述は唯吾々の問題に對する方向を指示する以上には出でないであらう。殊に交換手段としての貨幣が結局に於て關係を保たねばならぬところの價値が主觀價値論の上で如何なる地位を與へられるかについては更に詳述を必要とするであらう。又以上に於ては貨幣の價値はすべて本來の交換價値の意味に解せられてゐるのであるが、それは貨幣の貨幣としての主觀的價値に何等の問題なしとするのではない。茲には例へば限界利用說が貨幣の價値に適用し得るか否かの如き問題のあること周知の通りである。私は行論を根本的な一點に限定する必要のためにこれらの重要なる問題を割愛した。この省略は或ひは尙以上の敍述の意味を充分に明瞭になし得ないであらう。私は一面に於てこの說明の不足を補足するために茲に喜んで岡

橋教授の批判に答へるの機會をもちたいと思ふ。

既に一言したやうに岡橋教授は最近の眞摯なる一連の研究に於て、或ひはシュムペーター説の批評を通じて(「貨幣指圖證券學説と貨幣數量説」同氏著『貨幣本質の諸問題』昭和十一年、第二章)或ひは均衡理論の一般的性質との關聯に於て(同氏論文『貨幣價値論の動態論的性格觀の批判、内外研究昭和十二年七月)或ひは『又貨幣價値の歴史的連續性の構想の性格に就いて』(内外研究、昭和十二年十月)の研究を通じて屢〻私見を問題とせられ、特に上述の如き貨幣價値論に對して最も鋭き批評を加へてゐられる。從つて之を對照として私見を再述することは少くとも私見を明瞭にするために得難き機會であると思はれる。而も幸ひにして前段の所論を前提とすれば私が之について述べなければならぬ點は既に極めて僅少で足りる。蓋し前段の所論の中には教授に對する答も亦自らにして含まれてゐるからである。

先づ教授の第一論文に於てシュムペーターの批評を通じて示された私見への批判は次の如く直接に計算貨幣と交換手段としての貨幣とに關係するものである、曰く『このやうに、價値の尺度としての貨幣と、交換手段としての貨幣との關係は、中山助教授の貨幣生成論では、シュムペーターのそれよりも明確に現はれてゐると言ひ得る。[28]』『併しながら、この貨幣の生成論における一歩前進が、貨幣の價値の問題において、より一層の難點として待ちうけやうとは、中山助教授も豫期して居られざるがごとくに思はれる。[29]』即ち『中山助教授に從へば、現實の貨幣たるものはなにらかの意味においてそのものの材料價値に關係してゐる。(中略)しかも「こゝに貨幣が關係をたもつところの價値は、必ずしも貨幣の材料價値たることを必要としない」とされてゐるが、中山助教授はこれを如何にして論證されんとするか！[30]』『ある特定の財貨はそれ自らの材料價値の故に、價値の尺度たる貨幣となることが出來たのである。そうしてそれが、また、交換の手段たるとき、その價値は價値の尺度たる貨幣の價値に、從つてその材料價値に「關係がなければならない。しかれども中山助教授は「材料價値はそれの最も自然な形態であるけれども、廣義の貨幣の場合の如く、貨幣が固有の材料價値を有しない場合には、當然他の價値であり得る」と述べて、紙幣の如き材料價値なきものはその材料價値に關係があるとは言ら得ないと主張して居られるものゝごとくである。そうして紙片がなにゆゑ交換手段たり得るかについては一言も觸れて居られない。他の論者の言葉をかりて言へば貨幣たり得るゆゑの價値すなはち貨幣の根源としての價値と貨が幣貨幣として機能するゆゑの價値、職能價値との關係には全然、觸れては居られない。[31]』

即ち氏の主張は要するに私見が貨幣の貨幣としての價値と貨幣が貨幣たり得る所以の價値との關係を無視する

28) 岡橋教授、貨幣本質の諸問題、167頁。
29) 同上、168頁
30) 同上、179頁
31) 同上、181頁

ものであるとし、之を無視するが故に價値尺度の强調に於てシュムペーターからの一歩を踏み出し乍ら、結局はシュムペーターの指圖證券學說へ逆戻りしてゐるものであると斷定されるのである。私は私の貨幣價値論の重點がシュムペーターの指圖證券學說に一致するか否かを問はず一に貨幣價値の量的變動の問題、從つて又その數量說的把握にあることを指摘される點に於ては少しも不服はない。けれどもそれ故に二つの貨幣の價値の關係が無視せられてゐるとは抑も何處から得られる論斷であらうか。このことは前節第三段の問題群が私の貨幣觀に於て如何に重要な地位を占めるかを看取せられる讀者に對しては、もはや何等の附言をも必要としない。逆說的に云へば、計算貨幣を實現する限りに於ての交換手段が貨幣であるとする私の貨幣本質觀はむしろ茲に展開される豐富なる問題群を積極的にとり上げんがためのものである。この場合岡橋教授をして右の如き論斷に到達せしめた唯一の理由は、貨幣の關係を保つところの價値を以て必ずしも貨幣の材料價値たることを必要としないと述べた私の一句にあるものゝごとくである。或ひは教授をして云はしむれば若しことが證明せられないならば結局に於て貨幣の二つの價値の關係は解かれてゐないとされるのであらう。しかしこの點については既に前節の第二段に於てふれたところであるから茲には繰返さない。簡單に云へば貨幣が計算貨幣を實現する限りに於て關係すべき價値はむしろ一つの價値關係であつて決して單純なる計算貨幣の素材價値ではないのである。教授はこれについて『ある特定の財貨は、それ自らの材料價値のゆゑに、價値の尺度たる貨幣となることが出來たのである。そうしてそれが、また交換の手段たるときその價値は價値の尺度たる貨幣の價値に、從つてその材料價値に、關係がなければならない』と云はれる。しかしこの素朴なる二つの價値の關係の說明は明に吾々の茲に企圖する問題の

要求に答へ得るものではない。それは貨幣が計算貨幣たる資格に於て關係すべき價値の一つの具體的場合に外ならないのである。私見の關する限りに於て岡橋教授が以上を通じて示された主張は消極的には指圖證券學說的な貨幣本質觀に於ては貨幣の貨幣たり得る所以の價値は遂に問題として採りあげることが出來ないと云ふにあるのであるが、この主張は更に第二の論文に於て一層廣い地盤の上で展開される。簡單に云へば一般均衡論に於ては貨幣價値の基礎づけは不可能であらうと云ふことこれである。この證明は一見一般均衡論が經濟諸量の相互依存關係を基礎とすると云ふ形式的表現によつてそれ自ら行はれてゐるやうにも見える。[31] しかし乍ら教授自らの認められる如く『質を捨象せる純粹量なるものはあり得ない。從つて一般均衡理論にあつても經濟的數量間の函數關係のみを當面の問題とはすれ、既に經濟的數量の質的規定は與件として前提されて居る。この前提の上に立ちて各經濟數量間の函數關係を問題にして居るものゝごとくである。』[32] とすればこの證明は一體どうなるか。その場合には一般均衡論そのものゝ性格ではなくて、むしろその上に立つ人々の貨幣本質觀そのもの、即ち教授が不生產的と名づけられる[33]ところの名目主義的貨幣本質觀または交換手段學說そのものが貨幣價値の基礎づけの不可能な理由として擧げられねばならぬであらう。さうして教授はこれらの貨幣本質觀が一般に『貨幣は何故に價値を有するや』と云ふ貨幣の價値の基礎づけの問題、從つて貨幣の價値の靜的質的な問題を看過あるひは無視して貨幣の價値の問題とは專ら「貨幣の價値の大きさが如何にして決定せらるゝやの事情」の究明のみなりとなし、その動的量的な問題にのみ限定すること』[35] を以て不生產性とされるのである。私はこの論文を通じて教授が强く貨幣の價値の質的側面を强調される點については反對ではない。それはむしろ私が別の形に於て主張しつゝあるとこ

32) 岡橋氏、貨幣價値論の動態論的性格觀の批判、14—15頁。
33) 岡橋氏、同上、20頁。
34) 〃　〃　319頁。
35) 〃　〃　418頁。

ろである。けれども廣義における名目主義的貨幣本質觀乃至は交換手段說がすべて貨幣價値の基礎づけの問題を拋棄してゐると云ふ主張には贊成し得ない。これは交換手段說と價値尺度說とを餘りに單純なる對立に於て考へる見方から生ずる結論ではないかと思ふ。實際教授は大體に於て價値尺度學說と云ふ本質觀の下に生產費說と數量的見解との綜合を考へられてゐるやうであるが、[36] 同じやうな綜合は交換手段說乃至指圖證券說の下に於ても亦認められるところであらう。例へばワルラスの貨幣論がこの問題の展開に對する一つの暗示を與へてゐること吾々の既に指摘したところである。要するに少くともワルラス、シュムペーターを目標として之を語る場合には一般均衡論と貨幣價値論との結びつきは決して不可能ではなく、又それが有する貨幣價値論の量的性格は教授の見るが如く頗く消極的なものではない。[37]

第三の論文の主たる題目はミーゼスの批判を通じて、貨幣の價値が主觀主義的價値學說を以て基礎づけ得るかを論究することにある。論者のこれに對する答へは以上の二つの論文に於ける主張からして容易に推察し得る如く、否定的である。卽ちミーゼスの貨幣價値の連續性と云ふ構想は『貨幣の機能價値(利用價値)原理と、商品價値原理としての限界效用學說とを結びつけたもの』[38] として大いに高く評價されてゐるのであるが、この構想が右の結合の役割を果してゐるかと云ふ點に至つては教授は結局之を否定する。さうしてこの企圖の不成功が『ミーゼスの意圖にも拘はらず、貨幣價値論の動態的性格觀を勃興せしめるの機緣を與へた』[39] とされるのである。この論文に周到綿密なるミーゼス批判としてそれ自らの考察を要求するものであるが、吾々は論點を集中する必要のためにいまその仔細に立ち入り得ない。しかし乍ら右の結論そのものに對しては既に前段に於て私見と教授の動

36) 〃 〃 18頁註尙貨幣本質の諸問題、177頁。
37) 因に一般均衡論に於て貨幣論が問題となるとき主として Pareto から Divisia への問題の移行がとりあげられて Walras の貢獻が無視されてゐるのは不當である。貨幣論については吾々はむしろ Parets よりも Walras を出立點とすべきであらう。
38) 岡橋教授、貨幣價値の歷史的連續性の構想の性格に就いて、239頁。

態論的性格觀との相違を述べた私は殆んど新に補足すべき點を有しない。教授の見方はこの場合に於ても貨幣價値の基礎づけと云ふ問題を單純に素材價値との連絡と見てゐられる樣であるけれども、基礎づけの意味するところは素よりかゝる狹義のものではなく、從つて又吾々にとつてはミーゼスの如き基礎づけの仕方が主觀主義學說から期待し得る唯一の殘されたるものとも考へられないのである。しかしこの點については更に繰返すことを止めよう。吾々はむしろこの全面的なる否定の後に新に建設せらるべき教授の貨幣論の積極的なる展開を期待し、さうして其の場合には吾々の間の距離が內容に於て更に短縮されることを希望するものである。

七

貨幣の本質に關する論議は本來貨幣價値論への密接な關係なしには有效でない。その意味に於て私は以上に貨幣價値論の一斑を述べた。述べたところは恐らく充分ではないであらう、けれども少くとも私の抱く貨幣本質觀は之によつて更に明瞭になつたと思ふ。貨幣を以て計算貨幣を實現する限りに於ての交換手段であると云ふ命題の一見しての二元性が以上の說明で一掃されたとすることは或ひは尙困難であるかも知れぬ、しかし貨幣價値に關する以上の說明は大にこの困難を緩和するであらうと考へられる。實際私はいまも尙この內容を現はすためにより適當なる言葉を見出し得ないのである。私は最後に之をシュムペーター並びに高田博士の所說と對照することによつて今一度其の特質とするところを描き出し、同時にかゝを貨幣學說が貨幣價値論に於て期待する問題展開の方向を指示することによつて結論に代へたいと思ふ。

先づ第一に私の貨幣本質觀は敢て交換手段說を拒否するものではない。唯その交換手段が貨幣たるためにはそ

39)　249頁。

れは計算貨幣を實現するものでなければならぬと云ふのである。間接交換の必然性は勿論間接交換手段卽ち交換手段の必然性を生み出すであらう。しかしこの交換手段が間接交換の限界を規定するものとして一般均衡のシステムの中に登場するためにはそれは必ず計算貨幣を實現するものでなければならぬ。交換手段としての貨幣の必然性と一般性とはかくして一舉に說かれ得るであらう、と云ふのが私見の根本である。私はこの考へ方をワルラスの分析の上に樹立した。しかし旣に述べたやうにワルラスの敍述は充分に明確でなく、從つて私の考へ方がワルラスに對する唯一の解釋であるか否かは讀者の判斷に委ねる外はない。現に同じくワルラスから出發したと考へられるシュムペーター敎授はワルラスに於てさへ貨幣の本質が把握されてゐないことを繰返して指摘してゐるのである。[40]

しかしそのシュムペーターは私の見る限り、あまりにも交換手段の側面のみを强調してゐる。換言すればワルラスに於ては交換手段と並べ說かれた「通貨」又は計算貨幣の側面が忘れられてゐる。若しこの「通貨」の機能が單純に價値の尺度たることにありとするならば、それは或ひはシュムペーターの云ふが如く第二次的の機能にすぎないとされるであらう。しかし乍らこの機能を以て何よりも間接交換の限界を規定する點に求むべしとするならば敎授がその貨幣本質の規定に於てこの側面を看過してゐることは重大な缺點と云はねばならぬ。さうして若し貨幣論に於けるワルラスとシュムペーターとの相違が主としてこの一點にあるならば吾々は貨幣本質の規定に於て充分ならざるものはむしろシュムペーターの說明ではないかと考へざるを得ない。實際吾々を以て云はしむれば、單なる交換手段から一般的交換手段への移行に於けるシュムペーターの說明不足——この點は旣に述べた如[41]

40) 3シュムペーター、本質、261頁、267頁。
41) 同上、276頁。

く高田博士によつても亦明白に指摘せられてゐる點である。[42] ……はこの側面の看過から生ずる。即ちシュムペーターにあつては凡そ間接交換の手段たる財は何れも皆貨幣であつてそれが一般的なる一つの財に統一される理由は示され得ない。しかしこれらの財が若し眞に貨幣として一般均衡の成立に參加するものとすればそれらの財の間には必ず更に一定の關係が成立せねばならぬ。さうしてこの思考過程を辿つて行くときに吾々は當然一般的な計算貨幣乃至はワルラスの「通貨」に到達せざるを得ないのである。

高田博士の所說は前段でもふれた如く必ずしもシュペーターと同一ではない。しかし乍ら交換手段を以て貨幣の本質とし價値尺度を以てむしろ第二次的の性質とする點に於ては兩者全く軌を一にする。相違の最も重要な點はシュムペーターが貨幣の必然性を一般均衡から直ちに導き出さうとするに對し、博士に於ては貨幣を以て一般的交換手段とする限りその企圖は不可能であるとされる點にあるであらう。[43] しかしこの相違はシュムペーター說が單なる交換手段から一般的交換手段への說明を始めから拋棄してゐると見るとき結果に於ては殆んど同一に歸するものと考へられる。さうして然る限り私のシュムペーターに對する考へ方はそのまゝ博士の場合にも妥當するものである。附加して一言すれば私は博士が數多の交換手段から一般的交換手段への道を一躍『國家意志又は慣習によるところの選擇』に求められることに贊成し得ない。統一的なる一般交換手段の成立は何よりも理論體系內部の問題であつて、この理論的に成立する一般交換手段が具體的に採るところの形態こそ國家意志又は慣習の問題ではないかと思ふ。從つて若し計算貨幣の導入によつて一般交換手段の理論的說明が可能となるものとすれば敢てこれを拒否する理由はないやうに思はれるのである。

これに關聯して私はいま一度計算貨幣と價値尺度との用語上のニュアンスに注意を求めたい。私は以上に於て

42) 高田博士、前揭論文、52頁。
43) 高田博士、前揭論文、52—53頁。

は必要のない限りこの兩者を區別せずして用ひて來た。けれども之を實現するところの交換手段をして直ちに一般的交換手段たらしめるところの計算貨幣なるものは嚴密に云へば單なる價値尺度ではない。それは既に繰返して述べた如くむしろ價値尺度たることを通じて行はれる間接交換の限界規定作用に對して與へられたる名稱である。このことは實際之を實現するところの貨幣の特質を明にするのではなく、更に例へば國際經濟に於ける一つの貨幣の妥當範圍を內容的に把握するに役立つであらう。計算貨幣を以て單に價値尺度と解する場合には國際的流通關係にある諸國の互に相異なる貨幣はその間に爲替による換算が可能である限り互に代置し得るものであつて、從つて何れをも貨幣と認め得ると云ふ任意性が生れて來るであらう。しかし計算貨幣を以て單なる價値尺度を超えた一つの機能と考へるときは之を實現するところの貨幣は現實にこの機能の行はれる範圍に於てのみ貨幣として妥當するものであつて、單なる換算によつて無際限にその妥當範圍を擴張するものではないのである。國際流通のある部分については勿論この妥當範圍が重複することがあるであらう。しかしこのことは未だ一つの貨幣が一つの妥當範圍をもつことゝ矛盾するものではない。

私が交換手段の中に計算貨幣の存在を强調する理由は恐らくは既に盡されたであらう。殘るところはかゝる貨幣觀が貨幣價値論の展開のために如何なる積極的の役割を果すかと云ふ點である。私がこれを貨幣數量說の新なる展開の上に期待してゐることは既に以上に述べた。繰返して云へば貨幣數量說を從來の單純なる機械論から救ひ出して之を眞に貨幣理論の財產とするためには吾々は退いて貨幣の本質の考察に計算貨幣の重要を强調せざるを得ないのである。然し乍らこの方向を更に縷述することは餘りに吾々の當面の主題を離れることになるであらう茲には單にこの方向を點出して同學諸元の御敎示をうける機緣とするに止めたい。